

平成 12 年度 学術研究助成報告

ポーランド音楽と西欧の音楽

——ルネサンス音楽とバロック音楽をめぐる——

黒坂 俊昭

ポーランドは地理的に中欧に位置する。また第 2 次世界大戦後は長きにわたって共産主義政権下にあり、西側諸国との交流も充分に行なわれてこなかった。そのためポーランドの歴史的音楽遺産は、現在に至って未だ西欧諸国の音楽学会にあまり紹介されていない。ところが、このポーランド音楽は、歴史的には西欧の音楽と深く係わっており、西洋音楽史上かなり重要な存在なのである。最近になって、ポーランドの音楽学者たちはこの点を理解し、ポーランド音楽の西欧との係わりを説こうとするようになった。しかし、彼らの主張は殆どが民族主義的立場に立っており、ポーランド音楽の優越性を述べるばかりである。

本研究は、以上のような状況を踏まえ、西欧あるいはポーランドのいづれでもない第三者の立場から、公正にポーランド音楽と西欧の音楽の関係を解き明かすことを目的として行なわれた。ポーランドに赴き、ポーランド国立図書館のナウエンチ **Mariola Nałęcz** 女史の協力を得て同図書館の資料を調査し、ポーランド国立シヨパン音楽院のヴェンツォフスキ **Jan Węrowski** 博士と議論を重ねた。その結果、西欧の音楽のみに限定されて打ち立てられていた西洋音楽史の定説とは異なる数件の事項を明らかにすることができた。その内容については、現在研究中であるため、この場で紹介することができない旨、ご了解戴きたい。

米国におけるフューチャオロジー（未来学）の 理論研究の動向調査

後藤田輝雄

1970年代のアメリカでは、Herman Kahnの*The Next 2000 Years* (1976)、Alvin Tofflerの*Future Shock* (1970)や*The Third Wave* (1980)、John Naisbittの*Megatrends* (1985)などの著作が、未来研究の先駆的業績となり、学際的研究の対象として、日本でも注目を浴びるようになった。日本では、地球環境問題、食糧・資源エネルギー問題を中心に研究が盛んになって来ているが、日本における未来学の、このような自然科学分野への偏重は、日本の未来にとって好ましい状況とは言えない。これに反して、アメリカの研究機関や大学では、フューチャオロジー（未来学）は、情報工学、金融工学、国際・国内政治経済、経営学、戦略論、など、社会科学や人間科学をも、その射程に入れる、広範な学際的学問分野を形成するに到っている。

1966年に設立された世界未来学会（The World Futures Studies Federation）は、現在、世界80カ国、100都市に支部を持ち、3万人の会員を擁する巨学会に発展した。当学会関連の刊行物は、*The Futurist*（月刊）、*Future Survey*（隔月刊）、*World Futures Studies Federation Newsletter*である。

研究機関としては、日本でも著名な故ハーマン・カーンが設立したハドソン研究所が草分けであるが、ハドソン研究所は、現在、未来研究よりは、国際・国内政治経済政策の研究や戦略研究を中心としている。未来研究所としては、Alvin Toffler, James Dator, Clement Bezoldによって1977年ヴァージニア州に設立された *Institute for Alternative Futures* (IAF) があり、大学では、ハワイ大学のハワイ未来学研究センター (*Hawaii Research Center for Futures Studies*) が存在するのみである。全米でも、未来学で大学院レベルのコースを提供しているのは、ハワイ大学とテキサス

のヒューストン大学クリア・レイク校の 2 校を数えるのみである。このうち、未来学で博士号を与えているのはハワイ大学のみである。ハワイ大学には、世界未来学会の事務局長や会長を歴任した James Dator 教授がおり、ヒューストン大学大学院の未来学プログラム主任は、Peter Bishop 準教授がいる。共にこの分野の第一人者であることをインターネットで知り、私が日本の大学で「人類の未来」という講義課目を担当していること、講義内容の妥当性について意見交換を希望する旨のメールを送り、まず、ヒューストン大学に出向き、2 つのクラスを見学、討論にも参加した。

未来学は、検証不可能な未来を対象とするため、実証主義的科学にはなり得ない。それだけに、どのようなデータを組み合わせ、経験則を加味して、如何に未来予測の精度を高めるかに、かなりの神経を使う必要があり、方法論を決して疎かにできない分野であると言える。ピショップ教授の未来学クラスで、学生たちは、学際的研究分野で知られている主要な基本的方法について、網羅的、徹底的な訓練を受けることになる。さらに、物の見方や考え方、議論や思考の有効な提示の仕方、未来へのシナリオを書く訓練、企業からお金を取るができるような製品やアイデアの作り方の指導まで、すぐに役立ちそうな内容が盛りだくさんに含まれているのには驚かされた。テキストは、システム思考入門書 2 冊以外に、MIT の経営大学院教授、ピーター・M・センゲ著、*The Fifth Discipline: The Art & Practice of the Learning Organization*. (邦訳『最強組織の法則：新時代のチームワークとは何か』徳間書店 1995)、*The Fifth Discipline: Fieldbook*. など、ビジネス・スクールではないかと思わせるような内容であった。

ハワイ大学の Dator 教授は、「なぜ未来を研究するのか」という論点について、Institute of Alternative Futures の設立者の一人として、次のように説明する。要約すると、「今日、世界の変化は急激で、多くの人々にとって、ついて行くのが困難になってきている。新しい発明や改善が、私たちの生き方をも変えさせることがある。人々の価値観、態度、信念さえも変わる。変化の速度は、ますます加速し、明日に備えることを困難に

している。未来について研究することによって、人々は、将来に何が横たわっているかを、より良く予測できる。さらに重要なことは、今日、何かを決定し、その決定の結果を未来に実現するように努力することによって、人々はどのような未来を生きるかを、今日、能動的に決定できる。未来はただ生起するのではなく、今日の行為、あるいは、不作為を通して、人々は未来を選択し、創造することができるのである。」

Japanese Students Abroad : Cultural Adaptation and Personal Growth

Teresa Cox

“Japanese Students Abroad : Cultural Adaptation and Personal Growth” is the theme of the research project which I have been working on since the 1998 academic year. This research examines the process of cultural adjustment and the overall effect of study abroad programs on individual Japanese students, using case study interviews (see *Soai Ronshu* #16, pp. 163–166 for a background of the study). The ultimate goal of the project is to prepare a training film which can be used as orientation material for Japanese students going abroad.

It is hoped that this research will allow us to make some valid generalizations about cultural adaptation and personal growth of Japanese “*ryugakusei*.” Such research should provide a better understanding of the students’ adjustment process, and allow comparison with the experiences of international students from other countries. Furthermore, it is hoped that the documented experiences of Japanese students who have studied in America will provide insights and information helpful to future participants in study abroad programs. The

insights gained from this project will be published as a documentary once sufficient funds are available for final production.

Funding from this year's grant supported the second stage of this research project, which involved translating all of the interviews from Japanese into English so that I could analyze them, identify key comments and common themes, and employ a professional editor to edit these selections onto a separate videotape. The next step is to incorporate these segments into a documentary film with narration and additional visuals such as campus scenes and film clips of American university life.

I would like to express my sincere appreciation Soai University for their support of this ongoing research project which I hope will have practical benefits for our students interested in study abroad.

高橋滋子歌曲集「紅ばら」

高橋 滋子

平成 12 年度に研究助成を頂きまして、念願の「高橋滋子歌曲集 紅ばら」を出版する事ができました。この歌曲集は、音楽生活 33 年の間に書き貯めた歌曲の中から、17 曲を選んでまとめたものです。

編集にあたっては、大体作曲年代順に並べ、始めにサトウハチローの詩による 4 つの歌を持ってきました。これ等の詩は全て、「おかあさん」という詩集から選んだもので、氏の母への思いが込められた優しい詩です。温味のある旋律を使い歌にしました。

次に私の大好きな八木重吉の詩による 5 つの歌を置きました。氏独得の簡潔で澄んだ世界を音で表現しました。

その後にある歌は、個々に書いた作品で年代もばらばらですが、その中で山口誓子の詩による「紅ばら」は、私の作曲法上転機となった作品で特

に思い入れが深く、歌曲集のタイトルといたしました。歌曲は、私にとってとても重要な位置を占めるもので、ライフワークとしていきたいものです。

1人でも多くの方々に歌って頂き、それぞれの歌に対する私の思いを汲み取り感じて頂けば幸いです。